関西福祉大学

図書館だより

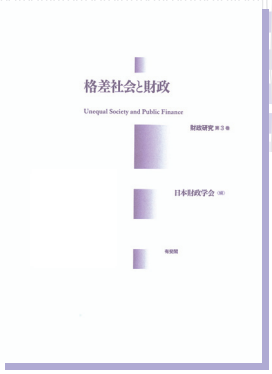
2008
No.19

関西福祉大学図書館
〒678-0255 兵庫県赤穂市新田380-3
Tel.0791-46-2506
Fax.0791-46-2535
2008年9月20日発行

著書紹介

格差社会と財政―財政研究第３巻
「福祉国家と社会保障財政の課題」
（日本財政学会編、坂本忠次他共著、有斐閣、2007年９月刊）

社会福祉学部教授　坂　本　忠　次



2007年度出版の著書を紹介してほしいということであるが、昨年は単著はなく、すべて共著の出版であり、著書としては、次の３冊があった。

一、日本財政学会編『財政研究』第３巻、「格差社会と財政」2007年９月刊

二、山陽学園大学・山陽学園短期大学社会サービスセンター編『日本のイノベーション　岡山のパイオニアⅠ』吉備人出版、2007年11月刊。「大原社研と倉敷労研」を執筆。

三、美作大学地域生活研究所編『平成の大合併と地域社会の再編・活性化』明文書房、2007年12月刊。「市町村合併と地域社会の再編・活性化」について津山市、吉備中央町の行財政の再編問題について執筆。

このうち特に一の著書について、社会福祉財政問題に関係が深いと思われるので、これについて紹介したい。

現代の日本経済において、政府の構造改革、その後のアメリカのサブプライムローン問題などを通じて不況は継続し、また、所得を中心とした格差構造が著しくなっている。企業間の賃金格差、雇用問題に発するワーキングプアの大量出現、年金問題や医療費に見られる世代間格差、都市・農村の地域格差などである。

このような日本経済の現実を前に、社会福祉、社会保障はどうあるべきか。日本の社会保障費をめぐる課題について北欧およびヨーロッパ先進国と比較し、日本の社会保障費では、家族・児童・労働政策などがヨーロッパに比べて少なく、介護保険も含め高齢者対策に特化し、年金、医療保険などに傾斜していることを述べた。

そうして、社会保障財源の国際比較をOECD、ユーロスタットの資料などをもとに分析。わが国では①個人保険料が高く事業者の保険料負担が相対的に低い。②公費負担の割合が近年低下している。③ヨーロッパの消費税（付加価値税）の社会保障費負担は必ずしも大きくない（食料品、医療費などへのゼロ税率、軽減措置がある）。④消費税率を上げる前に、企業間の格差を是正し、まず納付率を上げるべきことなどを論じている。なお、本書は、日本財政学会からの福祉財政に関する招待論文である。

地域社会福祉史入門（田代国次郎著、社会福祉研究センター、2007年10月刊）

社会福祉学部教授　田　代　国次郎

本書の紹介は、すでに「人間裁判」（朝日訴訟）の後継者･朝日健二氏によって『ゆたかなくらし』（2008年 No.310号）に「真の意味での学者としての品格」ある人の本として紹介されている。しかし、筆者自身は、残念ながら「真の意味の学者」であるとは少しも思っていない。むしろ、最初から学者だけは絶対になりたくないと思っていた。なりたかったのは、真面目な労働者になり、社会の最底辺の人々を支える仕事がしたいと思っていた。その結果が、いわば社会の底辺で生活する人々を支える社会福祉関係の仕事であり、なかでも研究教育分野の労働者になった。

しかも、その分野の仕事を大学卒業後すでに約半世紀近くやってきたが、貧しい一人の労働者としては、たいした支援実績を残すことは出来なかった。しかし、労働の仕方だけは明確であり、これまでの社会福祉実践が、あまりにも地方の底辺で生活する人々にとって距離がありすぎ、見えないものになっていた。本当の社会福祉実践とは、どんな田舎に住んでいても、どんな場所で生活していても、人間らしく生きる諸権利が確実に保障されなければ意味がない。それが現実には中央都市部と、地方の農山村では、かなりの差異がある。この差異を解消するためにも、従来の社会福祉実践方法を修正して、地域で生活する人々の生活現場に密着し、そこに実践の軸足と方法を移すように転換していく必要性が求められている。こうした「草の根福祉」を主軸においた方向を提起しているのが本書であり、同名の本が日本にはないと思われる。

内容としては、序章において無名の人としてヒロシマ福祉の父的存在の香川亀人（1897～1993）に新しい光を当てると同時に、地域社会福祉史の研究方法についても論述している。第一部から第三部までは、従来日本で見られる全国通史的な概論書風ではなく、可能な限り地方の地域生活現場に焦点をあてるように関係文献が多用化されている。終章においては、今後の研究課題を６点にわたって提起し、それと同時に岡山県の社会福祉史研究に大きく貢献した守屋茂（1901～1994）に関する研究と、東北地方の福島県社会福祉史研究を精力的に押し進めた本田久市（1943～2007）に関する研究を論述している。

このように、地方の地域に焦点を当てることによって、これまで無名にちかい人物にも光が当ることになる。

ケースで学ぶ医療福祉の倫理

（菊井和子・大林雅之・山口三重子・斎藤信也編、医学書院、2008年９月刊）

看護学部教授　菊　井　和　子

わが国の医療と福祉は科学の進歩と高度経済成長を基盤に発達し、日本は世界一の長寿国という輝かしい成果を挙げることができた。しかし、このことを少し別の視点で見れば、それは人口の中に多数の高齢者や障害者など、日常生活を営む上で何らかの援助を必要とする人を含む社会ということでもある。そうした中で、医療職者と福祉職者がチームを組んで援助を必要とする人のニーズに応えることが要求されるようになり、ここに「医療福祉」という新しい発想で医療と福祉の統合をはかる必要性が強く認識されるようになった。

医療福祉には多くの人がかかわる。ケアの受け手はあらゆるレベルの健康問題や社会問題を抱えて地域社会で生活している人々であり、ケア提供者は多職種の専門職者やボランティアなどである。現場では、この複雑な人間関係の中で、支援者も被支援者も当事者間の相反する期待や揺れ動く思いのあいだで板ばさみになり、しばしば混乱が生じている。

複雑で深刻でデリケートな倫理問題を抱える事例に対しては、これさえ当てはめればたちどころに問題が解決するという唯一最善の方程式というものはない。１つひとつの支援が合法か違法か、善か悪か、幸せにつながるか不幸を招くか、単純に割り切れるものではない。残された方法は、関係者が集まって問題を整理し、知恵を出し合い、慎重に議論を重ね、多かれ少なかれ不公平感や罪責感に悩みながら、協同作業で答を出していくしかない。熱い議論の過程で、ほのかな明かりが見え、苦悩が希望に転換する道筋が見えてくるはずである。

本書は、そのようにして医療福祉倫理問題の解決に挑戦した現場の事例をもとに企画された。全体は２部構成で、「第１部　手引き編」は医療福祉の倫理に関係する理論と問題解決のプロセスを分かりやすく解説したもの、「第２部　ケース編」は倫理的ジレンマを抱える14事例への解決案をくわしく検討したものである。本著は、卒業後看護や福祉の現場で活躍する学生や現在臨床で悩みながら働いている医療福祉関係者にとっては、現実感のある事例検討資料となると同時に、それを理解するために必要な倫理学の基礎知識が学べる格好のテキストである。本書を手にすることで、わが国の医療福祉の未来を担う人々が倫理的センスを身につけるきっかけとなり、医療福祉の抱える奥深い世界を読者の皆さまと共有できることを願っている。

看護倫理

「共同体、家、親孝行、礼、面子、和：東アジア文化及び倫理」

（小西恵美子編、蔡小瑛他共著、南江堂、2007年12月刊）

看護学部准教授　蔡　　小　瑛

本書は看護学生や実践看護師を対象に、今の医療に即応した看護倫理の教科書として、日常の看護実践とともに看護倫理の概念とその枠組みについて著した。

担当部分：日本のような共同体の倫理をもつ社会において患者は治療決定に、個人の命は家族みんなの命と言えるほど、家族との関わりの中で意思決定ができるように医療者が支援する枠組みを提案する。なお、臨床の事例を通して、「家」、「親孝行」、「礼」、「面子」、「和」など我々の伝統的な価値観を考える。さらに、日本が属する東アジア文化圏の倫理の特徴を考えることを中心に論じた。

「礼」とは人と人との間の深い遠慮であり、具体的には礼儀のことです。もともとは中国で生まれた儒教の「礼教思想」は中国よりも日本でよく保持されています。

「家」は、儒教では社会の基本単位であり、そこでは、さまざまな礼儀作法が個人と親、兄弟、友人との間のダイナミックな関係過程に深い意味を持ち、その過程が人格を磨き、洗練する働きをするのです。

「面子」を英語圏の心理学者らがself-esteemととらえてもまだその真髄にいたりません。「面子」は一種の自己尊重的な気持ちであり、人と人との間の「礼」が働いているともいえるのです。

「和」を求める東アジア文化圏の社会的な育ちのあり方には、まわりをつねに意識するのです。個人の「我」を主張するよりもまわりの「和」を求めるのが理想として重視されます。

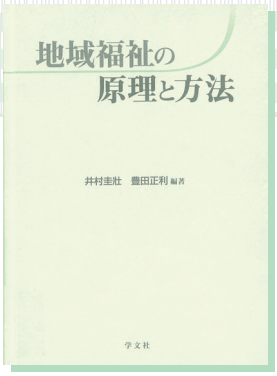
テクノロジーの革新とともに毎日猛スピードで変化している世の中ですが、現代社会がどんなに変化したといっても、それは文化の長い流れのなかのほんの一部のことです。われわれ現代人が生まれ育った環境は空気のようなもので、その文化・文脈を認識することはふつうはあまりありません。しかし、われわれの文化・文脈は無視できない事実としてあるのです。

グローバル時代に看護の国際協力や異文化間の看護を言及することは大事ですが、その前に、それぞれの文化・社会に根ざしている文化文脈を認識することは大切です。いわゆる国際看護とは、それぞれの文化・社会の特色を尊重したうえで構築していく共通性のある理想的な看護を目指すことを目標としています。そのためにも各自の文化の根底を認識することは、むしろ国際看護の基礎となるのです。

地域福祉の原理と方法

（井村圭壮・豊田正利編著、谷川和昭他共著、学文社、2008年２月刊）

社会福祉学部准教授　谷　川　和　昭



近年におけるわが国の社会福祉制度は、その基本的原理から具体的な福祉サービス利用の様式に至るまで、きわめて大規模に変化・変容している。

社会福祉基礎構造改革の一環として、社会福祉法の第４条では、「地域福祉の推進」を項目とする条文が新たに増設され、地域に暮らす私たち一人ひとりが、地域福祉新時代の主役であることが明記された。

一方、社会福祉士及び介護福祉士法も制定20年を節目に大幅な改正が行われ、社会福祉士には「地域の福祉課題の把握や社会資源の調整・開発・ネットワークの形成を図るなど、地域福祉の推進に働き変える役割」が、また介護福祉士には「施設・地域（在宅）を通じた汎用性のある能力」が、それぞれ新たに求められることになった。上記の点を思考すると、地域福祉に関する学習・研究は、わが国現代社会においては必須の条件である。

ただ、地域福祉の時代といわれる今日、「原理」と名の付く地域福祉の出版物は、ほとんどみられないことも事実である。このような状況を踏まえながら、本書は、地域福祉の「原理」と「方法」を形成するための役割を志向して、企画・編集されている。

章構成は以下のとおり。第２章は筆者が執筆担当している。

第１章　現代の地域生活と社会福祉
第２章　地域福祉の思想と理論
第３章　地域福祉の形成と発展
第４章　地域福祉の法制と組織
第５章　地域福祉の主体と実践
第６章　地域福祉の関連領域
第７章　地域福祉の財源基盤
第８章　地域福祉の政策と計画
第９章　地域福祉の専門援助技術
第10章　地域福祉と自立支援
第11章　地域福祉と権利擁護
第12章　地域福祉と福祉教育
第13章　地域福祉とNPO・ボランティア活動
第14章　地域福祉と住民参加・当事者参加
第15章　地域福祉の課題と展望

以上からも分かるように、地域福祉はきわめて広範な領域であり、地域福祉論もまた多岐に及ぶ。しかし、本書は地域福祉論の多岐・多様性を踏まえながら、論理上の統一性に心がけ、地域福祉の基本的「原理」とその「方法」を整理し、地域福祉の科学性、学問生を確立することをねらいとして編まれている。

地域福祉の学習・研究の一助として、本書を活用していただくことは有益となろう。

今回紹介させていただいた図書以外で、本学教員が執筆した図書は右記のとおりです。なお、2007年７月以降に発行された図書に限らせていただきました。すべて、図書館にご寄贈いただいております。どうぞ、ご利用ください。

教員名	書　名	出版社	出版年月
坂本　忠次	日本のイノベーション・岡山のバイオニアⅠ:2007年公開講座演集（共著）	吉備人出版	2007年11月
坂本　忠次	平成の大合併と地域社会の再編・活性化：岡山の事例（共著）	明文書房	2007年12月
田代国次郎	熱き祈り（共著）	福島介護福祉専門学校	2008年２月
田代国次郎	現代の貧困と公的扶助（共著）	社会福祉研究センター	2008年３月

本学教員推薦図書

看護学部 教授　小　海　節　美

書　名	著者名	出版社	発行年
納棺夫日記	青木　新門	桂書房	1997
健康帝国ナチス	ロバート・N・プロクター	草思社	2003
情報からの自立	結城　美恵子	ユック舎	2008

社会福祉学部 准教授　大　山　摩希子

書　名	著者名	出版社	発行年
子どもの養育に心理学がいえること	シャファー，H.R. 武藤隆・佐藤恵理子（訳）	新曜社	2001
子どもの福祉－発達・臨床心理学の視点から－	桜井茂男・桜井登世子・松尾直博	福村出版	1999
のび太・ジャイアン症候群	司馬理英子	主婦の友社	2001

社会福祉学部 准教授　前　田　美智代

書　名	著者名	出版社	発行年
ことばで「私」を育てる	山根　基世	講談社	2000
ことばに生かされて（相田みつを・人生の応援歌）	相田　一人（監修） 今井　久喜（編著者）	小学館	2002
「自分の木」の下で	大江健三郎	朝日新聞	2004
夢を見ない男　松坂大輔	吉井妙子	新潮社	2007

編集後記

今回、初・カラー版で発行されることになりました。カラー版にすることで、本館のイメージが伝わりやすく、皆さまに親近感を持っていただければと思っています。編集に携わったこの２ヶ月間、きっと今までとはまた一味違った仕上がりになるだろうなという期待の中、図書館業務に取り組んでいました。

かすかな秋の気配とともに、いよいよ後期も始まります。夏の間に、５人の先生方より著書の紹介をしていただきました。そして、３人の先生方より良書をお薦めいただいております。いずれも在学中に是非とも学生の皆さまに読んでもらいたい本です。読書の秋です。図書館で勉強も読書もゆっくり、じっくり楽しんでみませんか？

本学図書館スタッフは現在４名。より丁寧なサービスを心がけ、利用者の皆さまのお手伝いができるよう、それぞれの業務に努めていきたいと思っております。お気軽に声をかけて下さい。今後もどうぞよろしくお願いいたします。

（S）